

報告

大学生に向けた実践
——必修科目で学ぶ「台湾」——

胎中 千鶴

はじめに

第1節 科目の特性と受講者について

第2節 授業のねらい

第3節 授業の構成

第4節 受講者の反応

おわりに

(要約)

本稿は、大学の必修科目で台湾史の授業を担当する教員の実践報告である。ここで取り上げた「現代中国入門B」は、学科の「留学準備科目」であると同時に、上級年次で専門的な台湾研究をめざすための基礎科目でもある。大学の体系的な教育課程に組み込まれた授業で、背景知識を持たない受講生に「通説・俗説・誤説」の道を回避させ、台湾理解のスタートを切ってもらうためにはどうすべきか。その授業づくりの一例を示した。

「入門B」では、現在→過去→現在という流れで内容を組み立てている。15回の授業を受講した学生が、歴史の重層性を確認し、台湾が複雑な歴史経験を経て成立した独自の共同体であるという認識に至るような構成を心がけた。受講生の反応は一様ではないが、毎年、回を追うごとに「親日」イメージへの言及が減少する傾向がみられる。台湾理解を通して、学生たちが国際社会全体に知的関心を向ける第一歩となる科目をめざしている。

はじめに

日本における台湾研究は、この四半世紀で急速に学術的蓄積が進んだ。それは同時に、その成果をどのように社会に還元すべきなのかという新たな課題を台湾研究者にもたらすことになった。すでに学校や地域社会、国際交流の場などで、「台湾を学び、教える」活動は地道に展開されてきたものの、それでもまだ個々の現場で関係者がそれぞれ力を尽くすばかりで、その経験や方法論が共有されているとはいえない。

筆者自身も教育現場で孤軍奮闘を繰り返している一人である。2000年代後半から複数の大学で台湾史の授業を担当、現在は本務校で1年次生対象の必修科目のほか、2年次以上の専門科目、3、4年のセミナー、大学院などで同様の授業を受け持っている。専門性が高く受講者が少人数のセミナーや大学院はともかくとして、1年次生向け必修科目については、台湾の何を教えるべきか、それをどう伝えれば学生の関心を引き出せるのかなど、なかなか答えを見いだせず、今も日々悩みながら実践を重ねている。

本稿は、そうした試行錯誤のあらましを報告するものである。もとより報告を前提にデータを記録・分析してきたわけではなく現状の説明にとどまってしまうが、同じ課題に取り組む人たちにとって、たたき台の一つとなればと思う。

第1節 科目の特性と受講者について

筆者は現在、東京都新宿区にある私立大学「目白大学」（学生数約5,600名）の外国語学部中国語学科で専任教員として勤務している。本学科は中国語の高度な運用能力の育成を専門教育の主眼に置いているが、中国語圏の歴史・文化・政治・経済など異文化理解のための科目群も備えており、筆者が担当する科目（「現代中国入門A・B」「中国の歴史」「中国の文化」など）はこれらの科目群に属している¹。

本稿で紹介するのは、中国語学科の専門必修科目「現代中国入門B」（全15回）である（以下、「入門B」と表記）。これは後述する「留学準備科目」のひとつで、本学科の春学期（4月～8月）の「現代中国入門A」と連続し、各2単位の1年次科目として秋学期（9月～1月）に配当されている。「入門A」では中華人民共和国に関する基礎的な知識と現代史を主な内容としており、「入門B」では全15回を台湾や台湾史に関する授業にあてている。

筆者は2009年度の本学着任以降、「現代中国入門A・B」を13年間担当し、当初から「入門B」の授業内容を台湾や台湾史に特化してきた。現在、日本の大学で「台湾を教える」機会は少なからずあるが、それはたとえば中国史や文化史、中国語などの科目の授業内でおこなわれるというケースも含まれている。一方で、台湾理解を目的とする科目を必修科目に設定し、それを10年以上継続している「入門B」のような事例はまだ多いとはいえない状況だろう。本稿で事例として「入門B」を取り上げたのはそうしたゆえんである。

なお、科目名が「現代中国入門」であることに違和感を覚える向きもあるだろう。これは学科開設時に設置された科目名を継続させているためであり、授業内容に関してはシラバス等で「台湾史」であることを明記している。ややダブルスタンダードだが、科目名と授業内容の齟齬によって教育活動に不都合が生じるなどの問題は今のところ起きていない。

とはいえ、「入門B」を受講する学生は必ずしも台湾に関心があるとは限らない。本学科1年生はシラバス内容に関係なく必修科目として全員が履修を求められる。シラバスを読んで履修する他学科生もいるにはいるが、これは少数である。

また、本学では文系学部入試の受験科目が国語と英語の2科目なので、高校で世界史や日本史の授業を選択しなかった学生も多く入学する。そのため学生全般の傾向として歴史の基礎的な知識の不足がみられる。たとえば日本の台湾統治という史実についても、はっきり認識している学生はごくわずかといってよいだろう。

一方で中国語学科には、中国・台湾留学をめざして入学する学生が多い。本学科では北京・台北いずれかの協定校への短期留学（1か月）が必修で、さらに希望者は北京・上海・太原・台北などへの長期留学（半年～1年間）が可能である。長期留学をめざす学生は毎年多数にのぼり、これが彼らの学びの目標や動機づけになっていることは確かだ。結果的に本学科では、卒業までに全員が1か月の短期留学、3割ほどが長期留学を経験することになる。

つまり受講生の傾向を一言でまとめると、語学や留学には興味があるが、歴史や文化を学ぶことにはそれほど関心がなく、むしろ苦手意識をもつ学生が多い、といえるだろう。台湾に留学す

る可能性が高いのに「台湾を知らない学生」が受講する、というのが「現代中国入門 B」の置かれた状況である。

第2節 授業のねらい

次にこの「入門 B」が何をめざすのか、その「授業のねらい」について大きく3点あげてみよう。

1. 中国語学科の基礎科目としての「台湾理解」

本学科がディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）として掲げているのは、「中国語と日本語双方の高度な公共的使用能力の涵養」と、これを基盤とする「創造的で自立的な市民」の育成である。4年間の学びの主眼は中国語学習だが、同時に中国語圏の歴史や文化に関する知識を習得し、留学を通して世界に目を向け、市民社会の一員としての自覚をもつことを期待している²。

こうして学科の体系的な教育課程に組み込まれている以上、どの科目も履修の順次性を尊重したうえで、専門教育の一環としての学修機会でなければならない。「現代中国入門 A・B」も「留学準備科目」というカテゴリーに含まれており、留学を前提とした事前学習の役割を担っている。「入門 B」を通して、学生たちは留学前に最低限必要な台湾に関する基礎知識を得る。そのため授業内容も、担当教員の専門性を優先して組み立てるというよりも、むしろ項目ごとに濃淡をつけず、まんべんなくじっくり学べるような展開の工夫が求められる。ここが高校や市民講座などで単発の講座をおこなう場合と異なる点といえるだろう。

2. 台湾理解の入口を示す

以前、ある台湾研究者が、「台湾を理解する最初の入口を間違えてしまうと、簡単に後戻りできない」と述べていて大変印象的だった。確かに現在の日本には、グルメや観光、コロナ対策など台湾に関する断片的な情報がメディアにあふれかえっており、誰もが気軽に「台湾への扉」をノックできるようになった。しかし、それゆえにステレオタイプの台湾イメージを入口として選んでしまう人も増えたように見える。すなわち本シンポジウムの基調講演で国立故宮博物院長の呉密察氏が述べていた「通説・俗説・誤説」の道である³。

呉院長が言及したように、日本社会におけるステレオタイプの台湾イメージは、戦後から今日まで形を変えつつも相変わらず存在する。たとえば2000年代初頭までの台湾像は、日本とゆかりがありつつも、どこか遠い南のほうの場所、という、いわば無関心に近いものだった。それが2000年代後半になると、九份など各地の観光地整備が進んだこともあり、身近な海外旅行先として知られるようになる。「親日台湾」というステレオタイプが日本社会に定着していくのも同じ時期といえるだろう。

それまで日本の弟分のような台湾像を一変させたのが、2011年の東日本大震災である。多額の義援金などの支援を通じて、日本社会はようやく「身近な隣人」への近しい心情を持って

台湾と向き合うようになる。さらに2020年以降のコロナ対策では、台湾政府の強いリーダーシップやオードリー・タンの活躍などが報じられ、日本より先進的な社会としてイメージされる傾向にある。

時代に合わせて変化するこうした台湾イメージについて、すべてが誤りだと断じるつもりはない。しかし、そのなかに一貫してみられる「親日台湾」というステレオタイプについては、やはり看過できない。なぜなら「日本を好きな台湾が好き」という他者イメージは、何かをきっかけにいとまたやすく「反日」という対立軸を成立させ、歴史的事実にまで「否定」と「肯定」の単純な二項対立をもたらすおそれがあるからだ。

筆者が「入門B」という小さな場所でできるのは、少なくともそうしたステレオタイプのな切り口で学生が台湾理解の最初の扉を開けてしまわないようにすることだろう。これを見過ごせば、彼らを後戻りのできない旅に送り出してしまうことになる。「通説・俗説・誤説」の道を回避するために、彼らはどんな視点を持てばいいのか、教える側は何をどう伝えるべきか。台湾理解の入門編を教える立場にある者なら誰もが直面する課題と言えよう。

3. 良き市民としての異文化理解をめざす

既述のように、本学科のディプロマ・ポリシーでは、中国語の高度な運用能力を涵養し、それを基盤として社会における「創造的で自立的な市民」の育成を謳っている。「入門B」においても、台湾理解を通じて中国をはじめアジア地域や世界全体に対する知的関心を引き出し、学生が広くバランスのとれた視野を獲得することを期待している。

そのため「入門B」は、春学期に「入門A」で中華人民共和国の基礎知識や現代史を習得したうえで、引き続き秋学期に履修するように設定されている。こうした教育課程の順次性は、学生が日台関係だけに囚われることなく、日中関係や中台・米台関係などを視野に入れつつ台湾を相対化していくための一助となろう。アジアのなかの台湾、国際社会の一員としての台湾を理解することで、受講者が世界をフラットな視点で見渡し、人権や自由、平和などの普遍的な価値観について考えるための第一歩を踏み出せるようになれば、大学の教育課程で「台湾を教える」意義も、より明確に見えてくるのではないだろうか。

第3節 授業の構成

1. 授業の内容

現在、「入門B」では全15回を以下のように組み立てている。なお、取り扱うトピックとタイトルは②の17～19世紀部分を除き、胎中千鶴『あなたとともに知る台湾』（2019年）に準じている⁴。

① 台湾社会の概要（1～4回）

「行きたいところ」、「好きな国」／台湾は「南の小さい島」？／車内アナウンスは4種類／ス

マホのなかの「Made in Taiwan」／日本より進んでいる女性の社会進出／日本と国交がないのはなぜ？

② 17～19世紀の台湾（5～6回）

オランダはなぜ台湾に来たのか／鄭氏政権とは／清朝統治期の移民と台湾社会

③ 日本統治期の台湾（7～9回）

なぜ日本人はやってきたのか—1895年～1910年代／植民地とはどんなところか—1910年代～1920年代／「霧社事件」はなぜ起こったのか—1930年代／皇民化政策とは何か—1937年～1945年

④ 戦後の台湾社会（10～12回）

戦後の台湾社会で何が起こっていたのか—1945年～1947年／台湾社会はなぜ民主化できたのか—1950年代～1990年代／戦後の台湾社会と日本はどんなつながりがあったか

⑤ 現代の台湾社会（13～14回）

自分たちの歴史をどうとらえようとしているのか／どんな社会をつくろうとしているのか

⑥ まとめ・レポート（15回）

初回から第4回までは、地理・自然・政治・経済・言語・文化・エスニシティなど現代台湾社会の基本情報を解説する時間で、重要なイントロダクション部分である。第5回からは17世紀以降の台湾史を時系列にたどり、終盤に再び現代台湾社会に関するトピックに立ち返る。

このような現在→過去→現在という構成にすると、学生たちは台湾の複雑な歴史経験を念頭に置きつつ、あらためて現代台湾社会がもつ多元性や多様性、歴史認識、成熟した民主主義などを確認し、未来を展望することができる。その結果として、「親日台湾」などという一面的な台湾イメージが学生の意識のなかで自然に相対化されていけば、この学びがひとつの役割を果たしたことになるだろう。

なお、この科目は講義型だが、毎回終了後にコメントペーパーの提出を義務づけ、次の回の冒頭に質問に答え、前回の内容を補足するなどして一方的な展開にならないよう配慮している。2020年以降はコロナ感染対策により遠隔授業を余儀なくされたので、授業はYouTube動画をオンデマンド配信し、資料提示とコメント提出はGoogle Classroomで対応した。

2. 授業準備のための参考文献

「入門B」では教科書は指定せず、筆者が作成するプリントや小テストを使用しているが、配布資料の作成など準備の際に筆者が毎年愛用している関連書籍がある。主なものを4点ご紹介しよう。

- ① 伊藤潔『台湾—四百年の歴史と展望』中央公論新社、1993年。
- ② 周婉窈 [濱島敦俊監訳・石川豪・中西美貴・中村平訳]『増補版 図説 台湾の歴史』平凡社、2013年。
- ③ 薛化元編 [永山英樹訳]『詳説台湾の歴史 台湾高校歴史教科書』雄山閣、2020年。

④ 赤松美和子・若松大祐編著『台湾を知るための72章【第2版】』明石書店、2022年。

書籍①は90年代の刊行だが、時系列に台湾史を概観するためには今でも非常に有用である。現在の台湾研究者の歴史認識を確認するために必読なのが②。授業の方向性などに迷いが生じたら何度もページをめくる。③は台湾における台湾史教育のポイントをつかみたいときに助けられる。また、イントロダクション部分では④を旧版刊行時から大いに活用している⁵。

第4節 受講者の反応

さて、「入門B」を受講した学生たちは授業を通じて台湾をどのように認識したのだろうか。ここで学生の感想をいくつかみてみよう⁶。

① 台湾について、大学に入る前は中国の一つの地域だという印象しかなかった。それ以外には屋台が有名ということや「千と千尋の神隠し」の舞台と噂された名所があるなど、そういう表面的なことしか知らなかった。しかし学んでいくうちに、中国と似ているようで異なった文化を持っているのだとわかった。政治体制や通貨、人々が持っているアイデンティティなど何もかも違って、一括りにするのは間違っているのだと思った。

受講生たちの感想やコメントで最も多くみられるのが、上記①のような「台湾は中国と異なる社会」であるという「発見」である。中国のどこかにある中国語が通じる場所、といったような漠然としたイメージから抜け出し、やっと台湾の輪郭が見えてきたところだろうか。

② 中学・高校での授業では台湾は少し顔を出す程度であったため、大学の授業でより詳しく、原住民族について知ることができたのは大変ありがたかった。

③ ジェンダーレスやLGBTQに関して、アジアの中で一番進んでいること。女だから男だからといった性別や人種などで判断するのではなく、その人自身をしっかり見ているところ。コロナ対策で、早急に対策をとり被害を最小限に抑えたこと。

④ 多くの異なる価値観に基づく意見や主張に耳を傾け、それらをまとめて最大公約数的な理念や方向性を提示できる人が評価される。それがオードリー・タン。

台湾の輪郭をつかんだあとは、②③④のように台湾社会のもつ独自性に注目していく学生も多い。原住民族の歴史や文化、ジェンダー・ギャップをめぐる日台の比較などは毎年受講生の関心が高く、②を書いた学生はその後「原住民族の伝統音楽」を卒業論文のテーマに選んだ。これまで日本という立ち位置から一方的にまなざしを向けていた学生が、台湾社会、東アジアなどの複眼的な視点を意識し始める兆しなのかもしれない。

⑤ 台湾について自分は本当に何も知らなかったのだと気づかされた。白色テロや民主化への過程は特に驚きの連続だった。もともと高校時代は日本史を選択して、世界史の範囲は高校1年生のときにしか学ばなかった。その範囲では台湾については触れず、高校2年生以降の日本史で台湾に関して出てきたのは日清戦争のときに割譲されたことくらいだった。つまり台湾に関する情報は本当にタピオカくらいしか知らなかった。

勉強していた時期に香港問題〔2019年の逃亡犯条例改正案に対する大規模デモのこと。引用者注〕が起きたので、その時の台湾人の反応をリアルタイムで勉強できたのは貴重な体験だと思う。日本の若者の政治に対する関心の低さを恐れている身からすれば、台湾の老若男女が政治に常に目を光らせている状況はすごいと思っし、社会の成り立ちの過程を見れば納得できた。つらい経験をして、みんなで立ち上がって勝ち取ったものを、そう簡単に手放すわけにはいかないだろう。

この学生は、これまで日本統治期以降の台湾史に触れる機会がなかったため、二・二八事件や白色テロなどの政治弾圧や、その後の民主化運動の歴史が深く心に刻まれたようだ。台湾史を学びながら同時期の香港や日本の政治状況を見るにつけ、民主主義の意味や自身の政治意識をそこに重ねずにはいられなかったのかもしれない。「みんなで立ち上がって勝ち取ったものを、そう簡単に手放すわけにはいかないだろう」という最後の一文が私には印象的だった。

おわりに

大学の授業はいずれも体系的な教育課程に組み込まれており、本稿で紹介した「現代中国入門B」も留学準備科目であると同時に、上級年次で専門的な台湾研究をめざすための基礎科目でもある。そうした役割を担う授業で、「台湾を知らない」受講生に「通説・俗説・誤説」の道を回避させ、台湾理解のスタートを切ってもらうために教員はどうしたらいいのか。本稿はその授業づくりの一例を示した。

「入門B」では、現在→過去→現在という流れで授業内容を組み立てている。受講生が歴史の重層性を確認し、現在の台湾が複雑な歴史経験を経て成立した独自の共同体であるという認識を持てるような構成を心がけた。

とはいえ、授業がシラバス通りに進むとは限らないし、時間内に収まりきらず積み残したトピックも多い。たとえば学生の関心が高いにもかかわらず先史時代にはほとんど言及しておらず、17世紀以前の原住民族の歴史や文化への言及もまだまだ不十分である。一方で、ダイナミックに変化する現代台湾社会の実相を筆者自身がつかみきれていないのでは、という不安も常に伴う。教員が慢心せず、常にアップデートを繰り返していくことが授業のマンネリ化を防ぐために欠かせないだろう。

第4節で紹介したように、受講生の感想は一律ではない。毎年60人前後が履修するこの科目で、

学生たちが新たに台湾の何を知り、考えをめぐらせたかを一括りで語ることは難しい。しかし毎年、授業の回が進むにつれ彼らの質問やコメントから「親日」という表現が目に見えて減少することは確かだ。「親日台湾」イメージだけでは説明できない数多くの事象や史実を前にすれば、自然とこの陳腐な言葉も背景に置かれていくのかもしれない。

受講生のうち何割かは、短期あるいは長期の台湾留学を経て再び教室に戻ってくる。専門科目やセミナーでさらなる知識の吸収と議論を繰り返しながら、その蓄積を自身と台湾、さらには世界をつなぐ方法として活かしてくれることを願っている。

注

- 1 目白大学外国語学部中国語学科のカリキュラムについては以下を参照のこと。[目白大学公式サイト] [中国語学科カリキュラム] <<https://www.mejiro.ac.jp/univ/course/foreign/chinese/curriculum/>> 2022年6月20日アクセス。
- 2 中国語学科のディプロマ・ポリシーについては以下を参照のこと。[目白大学公式サイト] [外国語学部ディプロマ・ポリシー] <<https://www.mejiro.ac.jp/univ/about/dp/>> 2022年6月20日アクセス。
- 3 呉密察氏の基調講演については以下を参照のこと。[公開シンポジウム「台湾を学び、教える—台湾研究の成果をいかに社会に還元するか—」第I部録画] <<https://www.youtube.com/watch?v=YBx9GpLgUTY&t=3456s>> 2022年6月20日アクセス。
- 4 胎中千鶴『あなたとともに知る台湾—近現代の歴史と社会』清水書院、2019年。これは2022年度から高等学校の必修科目として設置される「歴史総合」に合わせて清水書院が企画したシリーズ「歴史総合パートナーズ」の一冊である。シリーズ全体のコンセプトとして高校生および大学生の読者を想定しており、実際の授業で受講者と教員が応答を積み重ねていくような展開となっている。
- 5 なお、遠隔授業に切り替わってからは、台湾史関連のYouTube動画を資料としてGoogle Classroomにアップし、事前・事後学習に有効利用している。主なものは以下の通り。
「Taiwan Bar」<<https://www.youtube.com/channel/UCRNshFT7BFoAPBcuAa5sgEQ>> 2022年6月20日アクセス。
「翰林國中歴史」<https://www.youtube.com/channel/UC3qdUNgu_k-HD_UgvmUnrJA> 2022年6月20日アクセス。
「SNET台湾」<<https://www.youtube.com/channel/UCmftk9gkQH-hiqUvXKDF4kQ>> 2022年6月20日アクセス。
- 6 コメントを書いたのは、2021年度現在中国語学科3・4年次に在籍する学生で、筆者が担当するセミナーの受講生である。